

I. 「それは時と場合によります」

—— 歴史社会学ふう

日本において少女という存在がひろく社会に認知されるようになったのは明治時代のこと。近代教育制度の整備により高等教育を受ける女性たちが出現し、女学生たちが社会に登場したことが大きな転機だと考えられています。もう子供ではないけれど妻や母でもない——そういうモラトリアム期間を過ごす彼女たちは、ときに「海老茶式部」などと^{やゆ}擲揄されながら独特の文化をかたちづくっていきました。

では、この女学生たちの出現以前には、現在私たちが少女と呼ぶような娘たちは存在しなかったのでしょうか？もちろんそんなことはありません。

また、女性の生き方の選択肢が広がり、女学生や未婚女性（こういう呼び方じたい、今ではあまりしませんね）が珍しくなくなった現代では少女文化は拡散・解体してしまったのでしょうか？そうとばかりも言えないようです。

「美少女の美術史」静岡展では、まずはじめに、日本の少女文化を歴史的に振り返ってみます。

江戸の町で評判をあつめた看板娘や明治の女学生たちを描いた錦絵、大正から昭和初期にかけて女学生文化の中核を担った少女雑誌の挿画や便箋、さらには高度消費社会における少女のイメージも紹介します。

時代や環境を超えて響きあう何かを宿しつつも、時代や環境によって千変万化してやまないあらわれをみせる「少女」。その不思議に分け入っていきましょう。

